ドロレス・レインボウ

卯月くるみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドロレス・レインボウ

【Ｎコード】
Ｎ８３２０Ｌ

【作者名】
卯月くるみ

【あらすじ】
とある離婚調停中の夫婦が、カウンセリングを受けている。夫は、妻が情緒不安定であること、その理由が自分にあるということを医師に伝える。一方の妻も、医師に請われるがままに二人の馴れ初めを話し出す。エリートの夫と漫画家の妻を結びつけたのは、妻の描いた漫画、「ドロレス・レインボウ」だった。

こんにちは。今日はよろしくお願いします。妻もお世話になっているそうですね。でもね先生、正直に言うと、私は全く持って正気だし、こんな所に、いや、失礼。カウンセリングに来る必要なんてないと思います。ただ、妻が最近どうにも情緒不安定でね。安心させるためにもここにきたというわけです。

妻の情緒不安定の理由を、私はきちんと理解しています。ええ、そうです。私がすべて悪いのです。私が、妻を愛せないことが理由です。え?私はゲイではないですよ。いえいえ、きちんと女性を愛しています。その証拠に、妻は現在妊娠しています。ええ、だからこそ情緒不安定なのかもしれませんがね。

私が妻をなぜ愛さないかですか。それを知るためには、まず、私のことを話すしかありません。

私は、三人姉弟の末っ子です。上は年の離れた姉が二人。それゆえ、姉たちは私をひどくかわいがりました。そのため、私は物心ついたときには思春期真っ盛りの、言い換えればもっとも愛らしい時期の少女たちの愛情を独り占めに出来たのです。その頃の少女たちというのはね先生、美しくて清潔で伸びやかで、輝いているのです。私はそのきらめきを目にすると、どうにも恍惚としてしまう。それゆえ、中学に入ってすぐに一人の美しい少女と恋仲になりました。ええ。自分で言うのもなんですが、昔から顔も頭も運動神経も人より優れていました。それゆえ、学校のマドンナを恋人に選ぶことが出来たのです。私たちは相思相愛のまま、高校受験を控えました。その頃でしょうか、ほっそりと華奢な彼女が丸みを帯びてきたのは。頬はふっくらとし、にきびが現れだしました。化粧を覚え、言葉遣いも妙に女っぽくなってきたのです。それは、想像以上に醜悪なものでした。私はどうしても彼女を愛せなくなってしまいました。それはもう、理性ではなく生理のレベルでのことです。彼女は泣きな

がら別れたくないと懇願してきましたが、私は彼女を捨て、今度は後輩と付き合いだしました。しかし、彼女も次第に女らしくなり、私は彼女に対しても嫌悪を感じるようになりました。そしてその次の恋人、彼女は私の近所に住む幼馴染の少女で、まだ１２歳でしたが、と付き合ったときに悟ったのです。私は、この年頃の少女にしか愛着をもてないのだと。

そして、私は高校生を卒業すると同時に少女たちとの付き合いを絶ちました。だって先生、この国ではそれは認められませんよね？自分を慕う幼い少女を捨てるのはまさに断腸の思いでしたが、それでも私は自分がかわいかったのです。しかし、神は私を見捨てなかった。私の愛する少女たちは、漫画の中にいたのです。無垢で、清廉で、美しく可憐な少女たちの活躍する漫画が、この国には星の数ほどあります。私はそれらを読みながら、自分がその世界の主人公で、その少女たちと恋愛する様を夢想しました。体温を持たない彼女たちとの恋愛は確かに寂しくはありましたが、それでもそう悪いものではありませんでした。

大学に入り、私を好きだといってくる女はぐんぐん増えていきました。しかし、私はその一人一人にお断りをしました。まわりは、私のことをロマンティストだと評価しました。ありがたいことに、顔が良くて優秀だと、マイナーな評価というものはつきにくいのですよ。そして私は大学を恙無く卒業し、仕事を始めました。しかし社会人というのは何かと疲れるものです。私だって人並みにストレスも感じます。一人暮らしをはじめた部屋で一人ぽつんとインターネットをしていると、運命の出会いを果たしました。ちらちら輝くディスプレイの向こうに、私は理想の女性、私の女神を見つけたのです。

……夫との馴れ初めですか？今思えば、私もたいてい浅はかだったと思います。

私の仕事は漫画を描くことです。私の漫画、ご覧になりました？私、本当はあんな漫画が描きたいわけじゃなった。私、少女漫画家になりたかっんです。でも、絵のタッチがあまり少女漫画には向いていないと評価され、長い下積み時代を送りました。ある日、突如穴の開いてしまった雑誌の枠を埋めるために、短編の漫画を一本描くよう知人の編集者から依頼されました。その雑誌というのが、なんというか、いわゆる萌え系の女の子たちを主人公にした漫画がたくさん載っているもので、小学生か中学生の女の子の出てくるラブ・コメディを描くように言われました。正直言って、断りたくて仕方ありませんでした。私は、恋する女の子のためにラブ・ストーリーを書きたいのであって、幼児性愛の男の人のために都合のいい物語を書くつもりはないのです。ですが、そのころ両親からの風当たりも強く、このまま売れない漫画家を続けるくらいなら家を追い出すとまで言われていたので、断ることは出来ませんでした。半ばやけになった私は、なんなら逆にそういう読者に媚びてやろうと思い、「ドロレス・レインボウ」という漫画を書き上げました。ええ、ご存知ですよね。ドロレスはナボコフの「ロリータ」の主人公の名前です。レインボウは、漫画絵の別称である二次元を虹にかけてつけた苗字です。話の筋も「ロリータ」をパロディにしました。なので、日本からの留学生の青年が、下宿先の未亡人とその娘、小悪魔的魅力たっぷりの少女ドロレスと暮らし、彼女に惹かれていくというものにしました。正直、この話はうけないとおもいましたし、評価されても困ると思いました。書き上げた途端、私はこの上なく苦しい気持ちになりました。こんなものが書きたくて漫画家になったわけじゃない、と何度も何度も思いました。いっそ、この原稿を破って漫画家も廃業してしまおうと思ったほどです。しかし、完成した「ドロレス・レインボウ」を担当編集者に見せると、彼は大喜びしました。これこそ本物のロリータだ！って。当たり前です。ナボコフの「ロリータ」そのままなのですから。小さな出版社のやる気のない編集者だったので、案外「ロリータ」を読んだ事がなかったのか

もしれません。しかし、私の予想を大きく裏切り、「ドロレス・レインボウ」は大評判になりました。

インターネット上で見つけたのは、「ドロレス・レインボウ」という漫画が、その日発売された漫画雑誌に載っていたという記事だったのですが、そこに添えられた写真の中に、私は天使を見つけたのです。赤い巻き毛の、生意気でかわいらしい少女ドロレス。今思い出しても震えてしまうほどです。彼女は本当に美しかった。私は飽きもせず、その小さな写真を見つめ続けました。翌日、私はさっそく本屋へ出向き、「ドロレス・レインボウ」の掲載された雑誌を買ってきました。ナボコフの「ロリータ」のパロディであるその漫画は、しかし新鮮な驚きと感動とみずみずしさにあふれていました。私はその３２ページの漫画を、繰り返し繰り返し読みました。台詞もほとんど暗記してしまったほどです。ドロレスはどのページでも愛らしく、魅力的でした。私はもはや、恋のとりこでした。私はさっそくインターネットで「ドロレス・レインボウ」について調べました。そして、作者が自作のホームページを持っているという情報を得ました。早速アクセスしてみると、昨日付けの日記に、自作「ドロレス・レインボウ」が雑誌に載っているという旨が書かれていました。そして、それと一緒にきれいに色づけ去れたドロレスの絵も。ドロレスは、大きなサングラスを鼻の頭に引っ掛けて、猫のように微笑んでいました。私はどうしようもなく胸が高鳴るのを感じました。ドロレスは自分のファム・ファタルだと、確信したのです。

「ドロレス・レインボウ」の反響たるや、すさまじいものでした。私は細々とホームページを開いて自分の漫画の宣伝をしていたのですが、そのアクセスカウンターが一気に跳ね上がりました。それも、１００や１０００というような数ではありませんでした。感想や応

援のメールが絶えずメールボックスに入り込み、担当編集者からの電話がじゃんじゃん鳴りました。私はふと思い立ち、急いでドロレスの絵を書き上げました。その絵をホームページに載せてすぐに、原画はないのか、あるなら売って欲しいという旨のメールが殺到しました。私はぎょっとしてしまいました。だって、そんなこと言われたことなかったんです。編集長からも電話が来て、「ドロレス・レインボウ」を連載して欲しいといわれました。私は迷いました。連載を持つことは長年の夢でしたが、「ドロレス・レインボウ」で夢をかなえるのは考え物だと思っていました。しかし、編集長は「ドロレス・レインボウ」の連載が上手く言った暁には、私の漫画を少女漫画雑誌で連載させてくれると約束したのです。私は、しぶしぶ「ドロレス・レインボウ」の連載を了承しました。

「ドロレス・レインボウ」はすぐに大人気になりました。「ドロレス・レインボウ」は連載作品になり、私は毎月新しいドロレスに会えることがうれしくて仕方ありませんでした。

インターネットの掲示板ではドロレスの話題で埋め尽くされていましたし、「ドロレス・レインボウ」をもとにした二次創作、小説、絵、マンガ、アニメーションに至るまでいろいろなものが生まれました。私はその一つ一つを手に入れ、眺め、咀嚼し、そして愛しました。しかしそれと同時に、言いようのない苦しみも感じていました。「ドロレス・レインボウ」が人気になれば人気になるほど、私はドロレスへの距離を感じ、激しい焦燥感に駆られるようになったのです。私がドロレスを愛するように、多くの人々がドロレスを愛しています。自分がドロレスへの愛情で誰かに負けているとは到底思えませんが、それでもいい気分はしません。私は二次創作でドロレスと恋愛している気分になっている男を嘲笑し、ドロレスが男に犯されている漫画を描きそれに興奮する男たちを軽蔑しました。ドロレスは、もっと崇高なものでないといけないのです。誰にも汚さ

れず、鮮烈かつ清潔であることが、ドロレスがドロレスたる理由なのです。私は、他の「ドロレス・レインボウ」愛好家と自分との間に、大きな隔たりを感じずには居られませんでした。
そんな風に悶悶としていたある日、私は上司からある出版社の広告の仕事を頼まれました。そこは小さな会社で、最近ヒット作が生まれたので、ここらで一発大きな宣伝をしてみたい、とのことでした。その出版社の名前を聞いたとき、私は狂喜しました。そこは、「ドロレス・レインボウ」の出版元だったのです。うまくいけば、「ドロレス・レインボウ」の作者や原稿を垣間見ることができるかもしれない。私の胸は大きく膨らみました。

「ドロレス・レインボウ」は非常によく売れました。私の原稿料はうなぎのぼりで、私は念願の一人暮らしを開始しました。アシスタントも、気立てのいい女の子を一人お願いできるまでになりました。ご存知ですか？漫画家のアシスタント料って結構高いんですよ。私は特に細かい部分の処理が苦手だったから、これは本当にありがたかったですね。それに、その子家事も得意で。お菓子も焼いてくれるし、本当にいい子なんです。ああ、話がそれましたね。潤っているのは私だけではなく、編集部も、訪ねて行くたびに調度品が新しくなっていたり、編集長のスーツが新しくなっていたりと随分な変貌ぶりでした。ある日、表紙の打ち合わせをするために編集部を訪ねて行くと、そこに見知らぬ男性がいました。話を聞くと、「ドロレス・レインボウ」を宣伝するために新聞と雑誌に広告を打つ予定になっているとのことでした。そして、その方は広告代理店の担当者だと。私はその人を不躾にも凝視してしまいました。だって、見たこともないくらいかっこいい人だったんです。背が高くて、すらっとしていて目元が涼しくて。本当に俳優さんみたい。私よりいくつか年下みたいでした。だから、私はあくまで鑑賞対象物として、純粋に彼の美貌に驚嘆していただけなんです。

編集部を訪ねたその日、運命の導きとしか思えないのですが、「ドロレス・レインボウ」の作者と会うことができました。作者は３０そこそこといった年恰好の女性で、眼鏡をかけたおとなしい感じの人でした。地味な服装に地味な化粧をした、まぁさえない感じの女性でもありました。彼女はぼんやりと私を見つめ、その目は熱く潤んでいました。ええ、私の容姿を好ましく思う女性は多いので、こういうことには慣れています。そして、それをすげなくあしらうこともできます。しかし、彼女は「ドロレス・レインボウ」の作者、つまり私のドロレスの生みの親なのです。敬意を払わないわけにはいきません。ですから、私は出来うる限り感じのいい笑みを浮かべ、彼女に手を差し伸べました。

代理店の方は、輝くような笑みを浮かべ、私に手を差し伸べてきました。私は昔から漫画ばかりに夢中で、男性には陰気だとか地味だとか言われ、まったく相手にされてきませんでした。お恥ずかしい話ですが、夫のほかに恋人を持ったこともございませんでした。なので、手を差し出されても私はどぎまぎするばかりでした。おずおずとその手に自分の掌を載せると、温かく包まれました。私の心臓は壊れそうに早鐘を打ちました。私はそれだけで、その人にほとんど恋をしていました。その人はさわやかに笑いながら、自分は絵が下手だから漫画家さんは尊敬しますよなどと言ってくれました。私が御謙遜を、と返すと、名刺の裏に下手くそな人間、多分ドロレスだと思いますが、を描いて見せました。ね？と困ったように微笑んだ彼の顔を今でもよく覚えています。私はその時から、彼に夢中でした。その日の夜、彼から連絡がありました。ええ。お返しに私もドロレスの絵をちょっと書いて、自分の連絡先を書いて渡したんです。その行動は本当に浅はかだったと、今は後悔しています。でも、

どうしようもなかった。彼はぜひ食事にでも、と私を誘ってくれました。私は本当は締め切り寸前でしたが、死ぬ気で原稿を仕上げ、ぶうぶう言うアシスタントをどうにかなだめて彼に会いに行きました。オシャレなイタリアンレストランで、私は自分がこんな地味でよれよれで恥ずかしくて仕方がなかったんですが、彼は屈託なく笑いかけてくれました。そして、食事をしながら彼が私に好意を持っていると打ち明けられました。

妻との初めてのデートは、青山にあるイタリアンレストランででした。店を決めるとき、これはちょっとベタ過ぎる気もしましたが、彼女はどうも男女交際になれていないようでしたので、これくらいわかりやすいほうがいいと思ったんです。事実、彼女は頬を真っ赤に染めて目元を潤ませ、盛大に感激してくれました。緊張しすぎたのか食前酒だけで全身を真っ赤に染め、フォークを落とし、ナプキンを何枚も変えてもらっていました。彼女、少しドンくさいところがあるんです。しかし、何か失敗をすると、彼女はちらりと上目遣いにこちらを見てきました。その表情は、ドロレスそのものでした。そして私はその瞬間に思ったのです。この人は、「ドロレス・レインボウ」の作者というだけではなく、ドロレスの母親でもあるのだと。そうすれば彼女に好意を抱かないはずがありません。よくよく観察してみれば、ささいな仕草などにも、ドロレスらしさがにじんでいました。漫画家というのは、やはり自分の中にあるものを物語にしていくわけですから、その人の描くキャラクターというのはある面その人の分身であるんですね。そのときに、私は「ロリータ」の主人公が、どうしてドロレスの母親と結婚したのかが良くわかりました。そりゃあ彼の
目的はロリータの父親になって継子を愛したい、ずっと一緒にいたいというものでしょうが、それでも、多少はロリータの母親のことも愛していたんだと思います。私も彼女と何度かデートして、最終

的には彼女の家に入って「ドロレス・レインボウ」の生の原稿を見たい、印刷機に入る前の一番みずみずしい、命のにおいのするドロレスにあいたいというのが目的でしたが、それでも、彼女に惹かれていた事は事実なのです。デザートのカプチーノを飲みながら、私は彼女に、自分が彼女に好意を持っていることを包み隠さず伝えました。彼女は真っ赤になってうつむき、かすかに震えさえしながら、蚊の鳴くような声でイエスと伝えてきました。

初めてのデートで告白されて、私たちは恋人同士になりました。そのことをアシスタントの女の子に報告すると、彼女は大丈夫かと心配してきました。彼女には彼が有名広告代理店勤務のエリートで、年下で、かっこいいとしか伝えていなかったんです。だから、彼が実は絵が下手なことも、なのに一生懸命苦手なはずの絵を名刺に書いてくれたことも、そのときに笑った顔がすごく素敵なことも、何一つ知らなかったんです。たしかに、私は彼より7つも年上でしたし、お世辞にも美人とかきれいなタイプではなかったし、お金もありませんでした。でも、彼は私を好きだといってくれたんです。飾らない私が好きで、一緒にいるとほっとすると。だから、私は彼を信じたかったんです。その旨をアシスタントに告げると、彼女は肩をすくめて、お金には気をつけてくださいねとだけ言ってきました。言っておきますが、私は彼から今の今まで一度も金銭を要求されたことなんてありませんよ。そして、彼女の予想を裏切り、彼はとてもいい恋人でした。私の仕事の調子を、体の具合を、ストレスを気遣いしょっちゅう会いにきてくれたり、愚痴を聞れたり、夜中に呼び出してもすぐに駆けつけてくれました。お花を買って届けてくれたり、取引先でもらった甘いお菓子をあんまりおいしいからといってティッシュにくるんで持ってきてくれたり、私を抱きしめながらこうしているときが一番幸せだと臆面もなく言ってくれたりと、ありとあらゆる方法で私を幸福にしてくれました。彼は家事も得意で、

私の散らかった部屋を掃除し、選択をし、手料理を食べさせてくれました。「ドロレス・レインボウ」の連載が絶好調で、多方面から仕事が入ってきていた私にとって、彼の存在は本当に救いでした。事実、アシスタントの女の子には本来のアシスタント業に加えて新しいアシスタントたちを束ねたり編集と連絡を取り合ったりと秘書のようなこともしてもらっていたので、助けられっぱなしでした。彼は次第に私の家にいる時間のほうが長くなりました。

彼女の恋人になったことで、私は彼女の家に行く権利を手に入れました。彼女の家は仕事場を兼ねているので、いつたずねてもインクのにおいがしました。それはある意味ドロレスの体臭なので、私は何度も何度も深呼吸をしました。勤勉な彼女は、よっぽどのスランプに陥らない限りはいつも仕事をしていました。そしてそこには、普通の「ドロレス・レインボウ」ファンが決して見れないもの、たとえば生の原稿の、インクが乾ききっていないようなドロレスや着色前の空ろな儚さをたたえた画用紙の上のドロレス、ネームと呼ばれる原稿を書く前段階の走り書きのドロレス、鉛筆で書かれた落書きのドロレスなどにあふれていました。私は何度か彼女の目を盗み、ゴミ箱に捨てられたドロレスを家に連れて帰りました。それらのドロレスはみな不完全なものでしたが、その不完全さが私にはいとおしかったのです。次第に私は彼女の家に入り浸るようになりました。仕事帰りに食糧を買い、彼女好みの食事を作ったり、たまった洗濯物を片付けたり、掃除をしたりしました。食事を作るたびに、自分の作ったものが彼女の血肉となり、めぐりめぐってドロレスのものになると思うと、そのたびに心が震えました。洗濯物を洗うたびに、ドロレスを生み出すときに彼女がかいた汗がきれいになることを惜しんだり半面ドロレスの存在を強く意識したり、掃除をするたびにごみを探ってコレクションを増やしたりと、なかなか悪くない日々でした。彼女も喜んでくれているので、まさに完璧な関係が出来て

いたのです。それから程なくして、彼女がアシスタントも増えたしもっと広い家に引っ越したいとこぼすようになりました。私はこれ幸いと、彼女にプロポーズしました。彼女と四六時中一緒にいられれば、よりドロレスの空気の中に生きることが出来るからです。

彼からのプロポーズは突然でもあり、必然でもあったように思えました。私はただただ嬉しくて、大きくうなずいていました。彼はこの上なく優しいし魅力的だし、私を愛してくれている。仕事は編集部との関係も含めて至極上手く行ってるし、４人のアシスタントを雇っているのでそこそこ時間に余裕もありました。今結婚しても、人並みに式を挙げたり新婚旅行へ出かけたりも出来そうでした。彼との結婚を決め、私はすぐに美容院に行き、エステに行き、いわゆる自分磨きに精を出しました。真っ白いウェディングドレスにはひどくあこがれていたのです。彼は鷹揚に、私の望む式にしてくれてかまわないと言ってくれました。私の理想としては式の後に一ヶ月ほどヨーロッパを廻ってみたかったのですが、彼はそれでは「ドロレス・レインボウ」が休載になってしまう、君はプロなんだからもっとプライドを持って仕事をするべきだと強い口調で言われてしまったのであきらめました。そのうちに暇が出来たら必ず行くと約束してくれましたし、どうしても旅行に行きたかったわけでもないし。でも、思い返せばそれが最初に感じた彼への不審でした。けれども、そのときはそれよりも自分が結婚するということや覚え始めたおしゃれやエステなどの楽しさに目がくらんでいたんです。ええ、今ならはっきりわかります。私がバカだったと。

結婚式はなかなかのものでした。私の姉たちは随分前に嫁いでいましたので、会ったのは久しぶりでした。彼女たちはすっかり年老いていて、かつての面影などどこにもなかった。どちらかといえば彼

女たちの娘たち、私の姪ですが、当時中学生と高校生でしたの方がまだいくらか興味をひきました。しかし、私はその時にはもう生身の少女たちよりも、ドロレスのほうに魅力を感じるようになっていました。それはきっと、私が私のファム・ファタルの母親と結婚したことにも関係があるのでしょう。白いドレスを着た彼女、もう私の妻でしたね、はとても美しかった。そこは素直に認めます。私は彼女に敬意と、それなりの愛情は持っていますから。彼女は自分好みの式を挙げられて、ご満悦でした。式を挙げて新婚旅行には一ヶ月くらいヨーロッパを廻りたいの、だから、一月休載しようと思うの。そういわれたときは心底焦りました。彼女が「ドロレス・レインボウ」を書かないということは、私がドロレスに会えないということです。ドロレスにあえなくなれば、私は気が狂います。それが私とのくだらないハネムーンのためなどといわれれば、反対しないわけには行きませんでした。私は強く否を唱えました。彼女は残念そうに、じゃあ仕事が落ち着いたら行きましょうね、と約束を求めてきました。私はうなずき、ドロレスにまた会えることを思い安堵しました。

結婚生活ですか？きわめて順調でした。夫になった彼は家事も相変わらずしてくれていましたし、私の仕事にも寛容でした。ちょうどその頃、アシスタント長の女の子のプロデビューが決まり、もう秘書業務を頼めなくなったので、新しく秘書を務めてくれる人を探していました。私の担当の編集者さんが見つけてきてくれたのは、若い漫画好きの男性でした。本人も昔は漫画家を目指していて、現在は何かそれにかかわる仕事が出来ればといっていたので、まぁうってつけではありました。時間が空けばアシスタントにも入ってもらえますし。夫の仕事が忙しく、日中は女ばかりの家ですから、男性がいればある面頼もしくもありました。彼もなかなかの男前だったので、アシスタントの女の子たちも大喜びでした。夫は、はじめは

彼に対して特にコメントはしませんでした。新しい秘書は非常に有能で、私と編集者やその他の関係者との間を上手く取り持ってくれました。その頃ちょうど、「ドロレス・レインボウ」をアニメにしてみないかという話をいただきました。自作の漫画のアニメ化というのは、漫画家にとっては大きな目標の一つです。私は驚き、そして喜びました。「ドロレス・レインボウ」がアニメ化すればまとまった額のお金も入ってきますし、私の漫画家としてのキャリアにも箔がつきます。あの小さな出版社の小さな漫画雑誌にとっても「ドロレス・レインボウ」は幸運にも掘り当てた金脈ですから、話はとんとん拍子に進んでいきました。秘書もうまく立ち回ってくれて、一番よい環境、たとえばよい製作会社、よい監督、よい声優さんたちなどを探すために奔走してくれました。彼はそのうち、「ドロレス・レインボウ」アニメ化のプロジェクトリーダーとでもいいますか、そんな感じになっていました。しかし、ちょうどその頃から夫の態度が変わり始めました。夫は、「ドロレス・レインボウ」をアニメ化することを止めるよう私に求めてきました。アニメになれば、莫大なお金と利権が絡んでくることや、失敗すればもう私の漫画家としての人気やキャリアはここでおしまいだとか、さまざまなことをいい脅しをかけてきました。私は彼のあまりの代わりように驚き、理由を尋ねました。

妻が雇った新しい秘書は若い男でした。かつては漫画家を目指していたというその男は、だからでしょうか、妻の些細な気持ちの変化にも敏感で、よく動いているようでした。妻はとてつもない才能の持ち主ですが、実務に関して言えばあまり出来るほうではないですしね。なので、彼のことはあまり気にしていませんでした。むしろ、感謝していたくらいです。しかし、彼が来てから程なくして、「ドロレス・レインボウ」をアニメにしようという動きが出てきました。ええ、アニメにするならば代理店も一枚かみます。私は初めて編集

部をたずねて以来、「ドロレス・レインボウ」担当のようになっていましたから、いち早くその情報を手に入れられました。「ドロレス・レインボウ」の人気はいまや不動のものとなり、となればメディアミックスもさもありなんという感じでしたが、私にはそれがいい考えだとは思えなかった。アニメになれば、多くの人がドロレスの姿を見ることが出来ます。今、弱小漫画雑誌で連載しているだけでも「ドロレス・レインボウ」は多くの人の心をつかんでいるのに、アニメになどなればさらにファンが増えます。いえ、ファンが増えること事態は結構なことなのですが、こまるのはにわかファンとでも言いましょうか、ちょっと「ドロレス・レインボウ」を見ただけですべてを知った気になり、大きな口を利く輩や、ドロレスを金儲けの道具に仕立て上げる輩、そしてドロレスのことをきちんと理解しないままでなんとなくその愛らしさに惹かれ、人に迷惑をかける形でその慕情を発露する輩など、そういったやつらが私の心配の元でした。他にも、ドロレスの愛らしさに嫉妬し彼女を中傷する者やゆがんだ愛情を抱くものがいないともいえません。心配の芽は早いうちに摘むべきです。私はアニメ化に断固反対しました。その上、あの秘書が「ドロレス・レインボウ」アニメ化のプロジェクトに入り込み、口出ししようといろいろ画策しているのを知り、戦慄しました。あの男は、私と同じく、ドロレスに惹かれている者だとすぐにわかりました。そして、自分の思い通りのドロレスを生むことで、彼女を征服したつもりになるのだと。私は、妻に何度も何度も考えを改めるよう求めました。あまりに強く言い過ぎたためか、妻は私をいぶかりました。そこで、私は彼女の秘書が彼女に黙って「ドロレス・レインボウ」のアニメ化を利用して金をもうけるつもりだとうそをつきました。彼はそのとき、妻の窓口で、妻はさまざまなやりとりを彼に任せていました。業界でもうわさになっている、ことによると、彼は「ドロレス・レインボウ」の権利を売り飛ばすつもりかもしれないとまで脅しをかけると、彼女は真っ青になりました。私はそこで、自分が仕事をやめて彼女の秘書になり、彼女と「ドロ

レス・レインボウ」を守るといいました。彼女は心底ほっとした顔になり、そうすると承諾してくれました。私はアニメ化するのはもう少し待ったほうがいい、このままでは君が損するだけだと畳み掛けました。彼女は従順にうなずきました。

秘書の一件以来、夫は仕事をやめて本格的に私のフォローに回ってくれました。私もむしろ、身内である彼のほうが部屋にいても気にならないし、いろいろ頼みごとも出来て楽になったようでした。「ドロレス・レインボウ」のアニメ化の件はおじゃんになりましたが、またチャンスはめぐってくる、今はそれよりゆっくりすごそうという彼の言葉に従いました。今思えば、あの時期が私たち夫婦の蜜月の最後だったみたいです。私たちは四六時中一緒にいました。そして、程なくして私の妊娠が発覚しました。彼はとても喜んでくれました。私も、結婚したからには子供も欲しかったので、嬉しかったです。彼も私も家にいるので、子育てにはうってつけだねとも言い合いました。私は、いろいろな事情を考慮した上で、子供が生まれて落ち着くまでの一年間、「ドロレス・レインボウ」を休載したいと私の担当編集者に相談しました。彼は渋い顔をしました。アニメ化を一度断ったためか、「ドロレス・レインボウ」の編集部内での扱いは、だんだん雑になってきていました。それに伴い、「ドロレス・レインボウ」自体の人気も落ちてきていました。彼はしばし考え込んだ後、いっそのこと「ドロレス・レインボウ」は一度終わらせて、子供を生んでからまた新しい作品を書いてみてはどうかと言ってきました。雑誌自体の人気も上がり、発行部数も安定してきていましたから、きっとそういってもらえたんだと思います。私は、それもいいと思いました。妊娠がわかってから、いくら漫画とはいえ幼いドロレスが大の男に媚びる姿を描く事が、苦痛になってきていたのです。だって、人の親ならば、年端も行かない子供にそんなことさせたくないですよね？私は、「ドロレス・レインボウ」の連

載を終える方向で話を進めました。家に帰り、そのことを報告すると、夫は烈火のごとく怒りました。君はここまで支えてきてくれたファンを裏切るのかと、見たこともない形相で詰め寄ってきました。私は何がなんだかわからず、泣くばかりでした。夫は、君はずっとドロレスを書き続けなければいけない、君にはその義務があるといいました。私には、どうして夫がそんなに怒るのかがわからなかった。しかし、ある日、かつてのアシスタントで秘書業もしてくれていた女の子に会ったときに、すべては合点しました。彼女は、私にとんでもないことを教えてくれました。それは、まだ彼女と私が二人きりで仕事をしていた頃、まだ恋人だった夫が私の家に頻繁に遊びに来ていた頃のことでした。私はものぐさで、いつも部屋を散らかしていたので、掃除はもっぱら彼の仕事でした。私は締め切り明けで疲れ果てていて、眠っていました。彼女も、机に突っ伏しうとうとしていたそうです。そこに、夫が合鍵を使って入ってきました。夫はいつものように、散らかった部屋を片付け、ごみをまとめてくれていたそうです。テンポよく動いていた夫の手が、不意に止まりました。夫は、私の書き損じの原稿を手にし、じっとそれをみていたそうです。そしてそれから、心底いとおしそうにその紙を撫で、そこに口付けたと。それは、恋人の描いた原稿をいつくしんでいるというよりは、文字通り恋人にキスしているようだったと、彼女は言いました。そして、彼はその原稿をたたみ、懐にしまいこみました。その紙には、水浴びをするドロレスの姿があったといいます。彼女は、あの男はもしかしたら幼児性愛者なのではないかと言いました。私はまさかと笑い飛ばしましたが、なるほどそう考えれば、彼の不審な態度にも合点がいきます。新婚旅行に行くために休載を許さなかったのも、アニメ化することに反対したのも、連載を終わらせるというと怒り狂うのも。私はだまされていたのだと悟り、ぞっとしました。ちょうどその日、彼女に会う前に病院に行って検診を受けていたのです。私のおなかの子供は、女の子でした。

彼女の妊娠がわかってから、とんでもないことばかりが続いていました。彼女は一年間も「ドロレス・レインボウ」を休載する気でいて、それを担当の編集者に相談したそうです。夫の私に何の相談もなく！私は彼女に裏切られたこと、そして何より彼女が担当に言われるがままに「ドロレス・レインボウ」の連載を終わらせるつもりでいるのを知り、怒りました。だって先生、パートナーに隠し事をするなんて、最低じゃないですか。おまけに、彼女は妊娠などという個人的な理由で「ドロレス・レインボウ」を終わらせるつもりだなんて。ドロレスはどうなるというのですか？私や、ドロレスを愛する人々はどうなるというのですか？彼女は無責任です。ひどいものです。だから私は彼女を責めました。彼女には、ドロレスを描き続ける義務があります。私とドロレスをつなぎ続ける義務があります。私はドロレスがいたからこそ彼女のそばにいたし、言い換えればドロレスがいなければ彼女と結婚した意味も、仕事をやめた意味もなくなってしまう。私の人生をこんなにしたのはドロレスだし、その責任はドロレスの産みの親である彼女にもある。妊娠していても、すぐには親としての意識がついてこないものなのですかね。彼女はもうすでに、ドロレスの母親であったのに。私は失望し、絶望しました。彼女は泣いていましたが、決して連載を続けるとは言いませんでした。私たちの関係は急速に悪化しました。それからすぐ、彼女は定期健診に行くといって家を出ました。しかし、夕方になっても、夜になっても、次の日の朝になっても彼女は帰ってきませんでした。何度もかけた携帯電話はずっと留守電でした。心配した私は彼女の実家、友人、知人などにかたっぱしから電話をし、彼女が来ていないかどうかを尋ねました。しかし、彼女の行方は杳としてしれません。私は気も狂わんばかりに心配しました。彼女は私の妻で、子供の母親で、おまけにドロレスと私を唯一結ぶ糸でもあります。彼女がいなければ、私は二度とドロレスに会えない。そうなれば私は死んでしまう。私は彼女の無事を神に祈りました。二週間後、

彼女から電話が来ました。彼女は電話口で、離婚をしたいと思っていること、「ドロレス・レインボウ」は今提出した原稿で最終回を迎えること、そしてその権利一切は担当編集者に譲ったということを言いました。私は正直、彼女が何を言っているのかがわかりませんでした。だって先生、そりゃあ私たち行き違いはありましたが、仲のいい夫婦だったんです。そりゃあ時には喧嘩もしましたが、私はいい夫だったんです。ねぇ先生、彼女はどこにいるんですか？私の妻は？子供は？私達、きっとうまくやっていける。また、夫婦にも家族にもなれる。私はきっと今度は妻のことも愛します。子供のこともかわいがります。誓ってもいい。なのに、先生。なぜ彼女は私とドロレスをひきはなすのでしょうか？

あの男が異常な幼児性愛者だとわかってから、私はすぐに覚悟を決めました。それはひとえに生まれてくる娘のためです。あの男と娘を引き合わせてはいけない。あの男の元で娘を育ててはいけない。私の本能がそういっていました。私は元アシスタントの彼女に頼み込み、彼女の家に置いてもらいました。私はそこで、最後の「ドロレス・レインボウ」の原稿を仕上げました。携帯電話に不在着信がぎっしり並んでいましたが、私は決して出ませんでした。原稿を仕上げると、私はそれをもって編集部に行きました。そして、私の担当編集者に「ドロレス・レインボウ」の一切の権利を引き渡しました。彼は、それを使ってメディアミックス展開をしていくなどといっていましたが、そんなこと知ったことではありません。私はただ、あの呪われた漫画と、異常な男と縁を切りたかったのです。私は編集室の電話から、夫に電話をかけました。そして簡潔に、自分が離婚をしたいと思っている旨を伝えました。夫は動揺していました。そして、「ドロレス・レインボウ」を終了させた事と一切の権利を担当編集者に譲ったことも話しました。今度こそ、夫は逆上し、泣き喚きました。どうして俺とドロレスを引き離す、俺はこんなにも

ドロレスを愛しているのにと泣く声に、めまいがしました。私たちの結婚生活は、先生、「ロリータ」のハンバートとシャーロット同様、偽者だったようです。でも私はシャーロットみたいに殺されなかった。シャーロットみたいに娘を危険にさらさなかった。先生、おそらくあの男は私を愛していて、子供と一緒に暮らしたいから離婚には応じないなどといってくるでしょう。ですが先生、そんなもの全くのうそです。あの男の狙いは、私の漫画だけです。だから先生、私、自分の右の手のひらを切ったんです。神経に傷かついたから、もう前のように漫画はかけない。でも、私には娘もいるし、まとまったお金もあります。両親もいます。仕事なんて探せばなんでもある。だから、もう怖いことなんてないんです。ねぇ先生。私、なにか間違ってますか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8320l/

ドロレス・レインボウ

2010年10月20日07時53分発行